

Computex2018 & InnoVEX2018 レポート< 1 > 台湾大手ベンダーの動向と注目を集めた SmarTEX エリア

台北市コンピューター協会 東京事務所 駐日代表 吉村 章

今回からシリーズで Computex2018 & InnoVEX2018 をレポートする。今回は Computex 概況及び台湾大手ベンダーの動向、注目の SmarTEX エリアをレポート。次回は Computex2018 で注目を集めた製品や技術を重点的にレポート。そして第3回では2016年から Computex に併設されて今年で3回目の開催となるベンチャーイベント、InnoVEX (イノベックス) をレポート予定。

■ 1,602 社、5,015 小間、6月5日(火)から 会期5日間で開催

Computex2018 & InnoVEX2018 の主催は Taipei Computer Association/TCA (台北市電腦商業同業公会) と TAIWAN TRADE CENTER/TAITRA (中華民國對外貿易發展協會)、2つ団体による共同主催。2018年6月5日(火)から6月9日(土)まで会期5日間で開催された。出展企業数は1,602社、5,015小間、Acer (宏碁)、ASUS (華碩)、Giga-Byte (技嘉)、MSI (微星) など台湾を代表する大手ベンダーから、中堅・中小企業、ベンチャー企業までが参加する一大イベント。台湾のIT製品を買い付けに海外からバイヤーが集まるアジア最大のITイベントである。

一方、2016年にスタートし、今年で3回目の開催となる InnoVEX (イノベックス) は、2018年6月6日(水)から6月8日(金)までの会期3日間で開催。世界21の国と地域から388組スタートアップチームが参加。ピッチコンテストでは102のエントリーから29のスタートアップチームが書類審査を通過してセミファイナルに進出し、6月8日(金)にはファイナリスト8社による決戦大会が行われた。(InnoVEX 2018 と台湾ベンチャー事情については本誌にて改めてレポートを予定)



写真1 出展企業1,602社、5,015小間、写真は南港ホール4F



写真2 製品を買い付けるために世界中からバイヤーが集まる

■ バイヤー登録は168の国と地域から 42,284人

台湾国内外の業界関係者なども含めた総来場者数はおよそ13万人。この数はほぼ例年並み。し

かし、主催者が注目しているのは総来場者数ではなく、外国人バイヤーの登録者数だ。

海外からのバイヤー登録者は168国と地域から合計42,284人。この数字は昨年比べて微増。具体的な人数は発表されていないが地域別バイヤー登録者はアメリカ、日本、香港、中国、韓国が上位5つ。これにタイ、マレーシア、ドイツ、インド、フィリピンが続く。中国からの来場者が一昨年、昨年と減少しているが今年も同様。一方でタイやマレーシアなど東南アジア諸国からの来場者が増えている。アメリカと日本の来場者はそれぞれおよそ4千人。去年に続き日本からの来場者が増えている。会場のあちらこちらで日本人グ

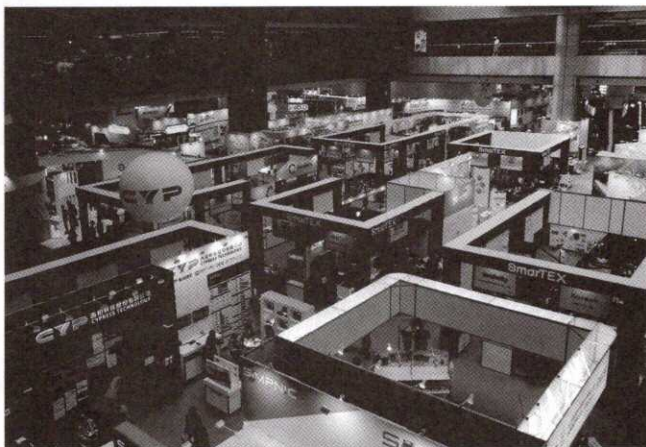


写真3 6/5～6/9まで会期5日間 写真は世界貿易センター第1ホール、SmarTEXエリア



写真4 世界中から集まるバイヤーは視察や情報収集ではなく、製品の買い付け、具体的な商談が目的

ループの姿を見かけた。

■南港ホール 4F、さまざまな方向性を模索する大手ベンダー

南港ホール 4F で最も存在感を示していたのはASUS（華碩）ブース。昨年の Computex で発表したサービスロボット「Zenbo」をメイン通路沿いのミニステージに配して、踊ったりステージを動き回ったりロボットのパフォーマンスを披露していた。また、ブース内ではノートブック、タブレット、携帯電話、Gaming PC など全方位的に製品を展示。来場者の注目を集めていた。〈写真5〉



写真5 ASUS（華碩）ブースでは揃ってダンスをする「Zenbo」が迎えてくれる

一方、Benq（明基）は無入コンビニのシステムを出展。顔認証のゲートから店舗内の清算レジまでブース内に無入コンビニの買い物空間を設えてデモを行っていた。また、今年もブース内にロボットアームを設置し、スマートファクトリー分野にも積極的に取り組んでいる姿勢をアピール。BtoB ソリューションを全面に打ち出した展示だった。〈写真6〉〈写真7〉

MSI（微星）は南港ホールの4FにGaming PCを出展、1Fにはスマート・ビーグル、テレマティスのソリューションを出展。フロアを分けた出展を行っていた。台湾の大手PCベンダーはGiga-Byte（技嘉）やAcer（宏碁）などGaming PCを中心とした方向に向かう企業とBtoBソ



写真6 Benq (明基)ではブース内に自動コンビニを再現、カゴの品物をボタンひとつで手軽に決済



写真7 こちらも Benq (明基) ブース、ロボットアームのデモ

ソリューションに向かう企業と2つの流れができつつある。そうした中で、MSI (微星) はどちらにも均等に力を入れている姿勢が印象的だった。<写真8>



写真8 MSI (微星) は南港の1F にテレマティクス・ソリューション

Mitac は BtoB ソリューションに向かう代表事例。今年も図書館の貸し出しシステムを出展。IoTを使ったソリューションはさまざまな分野で具体的な浸透を見せている。(BtoB ソリューションに向かう台湾大手ベンダーの一連の動きを見ていると ASUS (華碩) ブースが逆に保守的にすら見える) <写真9>



写真9 MITAC (神通) は図書館システムのソリューションを出展

一方、今年の Computex で個人的に最もショッキングだったのは Acer (宏碁) ブース。パソコン最大手である老舗 Acer (宏碁) のブースからパソコンやタブレットが消えた。今年の Acer (宏碁) は「Predator」(プレデター) というネーミングで Gaming PC を展開。独自の方向性を模索している。今年の Computex ではこの Gaming ブランドを全面的に押し出し、ゲームが中心の出展となった。<写真10>



写真10 Acer (宏碁) ブースからパソコンやタブレットなどIT端末の出展が消えた